

## ブリンの物語

この場所がかつては家だった。今はそれは灰となり、焦げた木の土台の残骸は夜明けの光の中でくすぶって煙りをあげている。ブリンは身をかがめて、彼女の剣の湾曲した平らな部分を、足元のウスクの戦士の死体のぼろぼろの服できれいに拭いた。彼女はこの悪魔崇拝者の右肩に垂直な打撃を与え、胸を半分切り裂き、即座にそいつを倒したのだった。ここがかつてはケルとダーナスの間の男爵領の境界の端にある農業集落だったが、今ブリンの周りには7つの死体が散らばっているのみだ。彼女はいつらがイナゴの群れの邪悪なシンボルをたてて村を略奪して廃墟にしているところに追いついて、全員を倒したのだった。

こいつらはただの落伍者だった。敵の本隊は夜の間村を通過し、日が昇る前に先に進んでいた。ブリンは過去2週間、やつらを追跡していた。彼女はやつらの襲撃の後に残された幾人もの生存者と話して、誰がやつらのリーダーなのかを知った。ウィレム・モラント、城塞の前の執事、ケルのチャンピオン、そして有名な元帥だ。今では彼は、裏切り者のモラント、同族殺しのモラント、悪魔崇拝者のモラントと呼ばれ、城塞が破壊されたときに彼の犯罪が暴露された。

ブリンは立ち上がって剣をしまい、彼女を取り巻くひどい静けさの理由を理解した。いくつもあった家屋、納屋、屋外トイレなどは、1つも残っていなかった。家畜は囲いの中で屠殺され、腐敗するままにされていた。この村を故郷としていた人々の姿はなかった。ただ、その匂いを嗅ぐことができるだけだ。彼らの焦げた骨は今や灰の中に混ざってしまっていた。

彼女は最近、同じ光景が何度も何度も繰り返されるのを見てきた。焼け焦げた町や村、その住民はウスクとそのデーモンマスター達によって一掃され、生きたまま燃やされたか、儀式的に虐殺されたか、流血のうねりの中で単に切り倒されて引き裂かれた。いつもブリンは到着するのが遅すぎた。いつも彼女は罪のない死者達に復讐を誓った。そしていつも、それは彼女に城塞のことを思い出させた。

ウスクはアーショウの巨大な城塞を奇襲し、その時、巡察官とブリンの仲間の学生達はまったく準備ができていなかった。彼らは、モラントや他の人々によって裏切られていた。テリノスの誇り高き長年の擁護者たちは、暗い場所でささやかれた強欲な嘘によって悪に転じたのだ。

警告の鐘が鳴るのは遅すぎた。その時、ブリンはベッドから一番最初に飛び出て、兵舎のドアまで一番最初に走った。皮肉なことに、兵舎のドアを引き裂いた激しい爆発が彼女を瓦礫の下に埋めて無力にしていなかったら、一番最初に死んだのは彼女だっただろう。彼女はウスクのブラッドウィッチがカチカチ音をたてながら彼女の友人達を切り倒していくのを、怒りの熱い涙を流しながらただ見守っていることしかできなかった。

モラントは虐殺を助けていた。ブリンは、彼が自分の剣、つまり彼が守り育てると誓った人々の血で濡れた、かつては誇り高かった鋼鉄の剣で、二段ベッドのパートナーであるフローレンを殺すのを見ていた。

彼女がようやく瓦礫から抜け出るまでに、全ては終わっていた。今彼女の目の前に広がる、村の焼け焦げた残骸を包む不気味な静けさと病的な沈黙と同じものが、あのとき城塞全体を覆っていた。彼女は一人で幸せな歳月を過ごしたホールや通路をさまよひ、血まみれの死体の間を歩き回って、最後の一人で、友人であり導師でもある家庭教師を見つけた。

城塞が陥落した時、すべての巡察官が城塞にいたわけではなかった。テリノスのウスクに対する防衛を指揮する任務から離れることができた者達は、再び城塞に集合した。ブリンは死者の葬儀を手伝うためだけにその場所にとどまっていた。彼女はアリス・ライネの言葉を繰り返し思い出していた。アリスは、他のどの巡察官達よりも、ブリンにとって教師であると同時に友人であり、彼女が城塞に初めて配属されたとき以来、いつも助言を提供していた。

「私があなたと他の新人達に初日に教えたことを思い出さない。」とアリスは言った。「巡察官はテリノスを保護するものです。私たちは人々の盾です。私たちは復讐のための復讐を求めません。」

ブリンはその助言に悩んだ。モラントに正義の裁きを受けさせたいという願望と折り合いを付けるのに苦労した。だが、あの日にアリスがそのレッスンを教えたすべての人達が今は死んでいるということにある日気づいた。彼女の指導者の言葉に関係なく、ヤツらに復讐するのは彼女の義務だった。

彼女はウスクを追跡して馬を走らせた。ヤツらは城塞での残虐行為の後で、いくつかの部隊に分かれていたので、彼女は自分の故郷の男爵領、フォーシンがある北に向かった敵を選んだ。それ以来、彼女は連中を追い続けている。

何かの物音がブリンを物思いから呼び起こした。ひづめの音。彼女は村の広場の廃墟で素早く振り返り、彼女の剣は鞘からもう一度引き抜かれた。

馬に乗った男達が近づいてきた。彼らは近くの丘を登り、この村に向かってほこりを蹴り上げて駆け寄ってきた。彼女は目に手をかざして朝のまぶしい光を遮った。

騎士は4人だった。一人は、焦げた木と渦巻く煙の中、太陽の下を見事に流れるペナント、色の波紋を運んでいた。彼女は、青地に黄金のアレリオンを描いた紋章を取り出した。それは彼女の叔母、フォーシンの男爵夫人、アデリンの紋章だった。

彼女は剣を握ったまま待ち受けた。

騎士たちは村に駆け込んできて彼女の前で手綱を引き、馬たちはいなないて土をけて灰の雲を巻き上げた。一人目の騎士は彼女を見つめた。彼は太っていて、疲労で顔を赤らめ、片方の肩に金の刺繍が施されたケープが付いた赤いジャケットを着ていた。ブリンは彼を知っていた。彼の名前はジェロルドであり、彼はアデリンの法廷顧問の一人だった。

何かの予感が彼女に迫ってきた。

「レディ・ブリン」ジェロルドは彼女を認めると、警戒を緩めて安堵の表情を見せた。彼女が巡察官以外の称号は望まないと何度も言っても、彼はいつも彼女のことを「レディ」と呼んだ。

「あなたに追いつけないのではないかと心配しました」と彼は続け、少し苦労して降り、仲間の一人に手綱を投げた。「城塞であなたはウスク・イランを追跡していると聞きました。」

「どうして私を探していたんだ、ジェロルド？」彼女は彼が近づくと尋ねた。「ケルは、私の叔母の代理人にとってさえ、もはや走り回るに安全な場所ではないぞ。」

「そう思われるでしょうな。」とジェロルドは村の廃墟を心配そうに見つめながら答えた。「ケロスは知っています。私は何年もハイモントを離れていませんが、これ以上緊急な用件はなく、そしてバロネス・アデリンはこの仕事を他の誰にも任せようとはなさいませんでした。」

「何が起こったの？」ブリンは問いただした。彼女の恐れは膨れ上がる。ジェロルドは言葉を注意深く選ぶように、唇をすぼめた。

「あなたのいところ、レディ・キャスリンは亡くなりました。」と彼は言った。

「そんな馬鹿な。」ブリンは、聞き間違えたかと思った。失望が他のすべての考えを覆い隠し、彼女の心はジェロルドが真実であると言ったことを受け入れるのを拒否した。

「これ以上の悲しみを与えないよう、その詳細は民には伏せられています。」血色の良い表情を曇らせて、ジェロルドは続けた。「ですが、アッパーフォーシンは闇の勢力に襲われました。あなたのいところは彼らを撃退する戦いで殺されました。」

「ウスク？」ブリンは鋭く尋ねた。心臓の鼓動が早くなる。彼女が過去数週間にわたって耐えてきた事を思うと、それが現実とは信じられなかった。

「そうではないようです。報告はまだ不完全ですが、ネクロマンサーとの噂があります。」

「なぜそんなことが？」怒りと悲しみが胸の内ではせめぎ合った。叔母の王宮であるハイモントに初めて訪れたときから、彼女はずっとキャスリンを知っていた。キャスリンはいつも、ハイモントの城塞の花壇と廊下を通る

架空の冒険をしようと言って、2人の子供は一緒に遊んだものだ。数年前にブリンが最後に彼女に会ったとき、キャスリンは男爵領の上部地域の支配権を引き継いで、フォーシンの貴族としての彼女の最初の任務を行う準備をしていた。彼女は緊張しつつも興奮していた。

「彼女が死んだなんて信じられない。」ブリンは首を振ってつぶやいた。「叔母は取り乱しているに違いない。」

「男爵領全体が嘆き悲しんでいます、マイレディ。」ジェロルドは早口で答えた。「ですが、このような時代には、行動こそが必要とされます。レディ・キャスリンが亡くなった今、バロネスは王位継承の線を確認することを強く望んでいらっしゃいます。」

ブリンはフォーシンの紋章に目を向けて以来、そう言われることを同じくらい恐れていた。彼女の母親は、部族民と盗賊が親友だったフロストゲートの寒くて荒々しい通りでブリンを育てた冒険家だったが、彼女が愛した男、ブリンの父は、バロネス・アデルンの弟だった。彼はハイモントの宮廷よりも部族の女性の配偶者としての生活を好んではいたが、彼の血統は依然として娘にフォーシンの支配者とのつながりを提供していた。

「私はおまえと一緒にには行きません。」彼女はジェロルドに言った。「私は城塞の巡察官であり、叔母の宮廷のメンバーではありません。彼女はこのことを理解していると思っていました。」

「あなたはこれまで男爵領の3番目の王位継承者でした、マイレディ。」ジェロルドは言った。「あなたのいとこが亡くなったので、あなたはアデルンの直接の相続人です。継承の順位は明らかです。」

「私は巡察官の誓いを立てた。」ブリンはそっけなく繰り返した。そしてウツクの死体を身振りで示し、その誓いがどのように行われたかについて考えないようにした。彼女が最初に城塞に入学したとき、彼女は、自分の宣誓式も他のすべての人と同じように、大礼拝堂の響き渡る栄光の中でクラスメート達に囲まれて、彼らの誓約と義務の言葉がステンドグラスの窓とアーチ型の天井からこだまする中で行われることを想像していた。だがその代わりに彼女は、総巡察官の代わりに立つ石像の前に一人でひざまずき、誓いの言葉を唱えたのだった。その間、彼女の後ろでは死体が運び出され、敷石から血が拭き取られていた。

「城塞での虐殺以来ずっと、私はこの獣たちを追跡してきた。」彼女は続けた。「ヤツらはケル中に破壊の跡を残してきた。私がヤツらに追いつかなければ、あと何人の命が失われるだろう？」

ジェロルドはため息をつき、他の騎手をちらりと見返し、ブリンを振り返った。

「男爵領のためでないとしたら、あなたの叔母上のために、引き受けて下さい。彼女は大変困難な状況にいらっしゃいます。唯一の、最愛の子供を失うことは十分に悲惨です。しかし今、彼女はこれまで以上にその肩に男爵領の未来の重みを負っています。フォーシンは、このような時代に王位継承の危機を放置することはできません。」

「それが私の義務だと言うの？」ブリンは言った。「叔母の後継者であることを受け入れるのは、より大きな善になるのかしら？この追跡を放棄することは、正しい選択なの？」

「ハイモントに来て、少なくともそのような問題についてバロネスと話し合うようにお願いします」ジェロルドは言った。「私たちは断崖絶壁に立たされています、レディ・ブリン。男爵領がリーダーを失って滅びると、数千人が死ぬことになるのです。」

ブリンは目をそらし、悩んだ。彼女は城塞に響いた悲鳴、血の匂い、ウスクの笑い声を思い出した。暗黒の狂乱に負けたモラントを思い出した。彼のかつて高貴だった顔は、怒りと血の欲望のしかめっ面になっていた。彼女でなければ、誰が彼の罪を罰することができるだろうか？彼が手引きをした虐殺を生き延びた自分よりも、正義を与えるのにふさわしい人はいるのだろうか？

「気づかずにはいられないのですが、マイレディ。」ジェロルドはゆっくりと言った。「まだ刀を抜いていらっしゃいます。」

ブリンは見下ろし、驚いて、アドバイザーが正しいことに気づいた。あまりにもきつく、湾曲した鋼を握りしめていたので、剣が揺れ始めていた。アリスの別の教えを思い出して、彼女は予期せぬ恥ずかしさを突然感じた。

「剣と盾はあなた達の道具であり、それぞれがそれ自体で価値があります。」日光が城塞の写字室の高く開いた窓から差し込んで、暖かい夏の空気に漂うちりを映し出すなか、教師は学生達に言った。「皆さんは、剣よりも他の何かを好むかもしれません。ウォーハンマー、メイス、ファルシオン、その他様々な武器を。目的はすべて同じです。これらは殺すために作られたものです。どんな武器を使うにしても、敬意を持ってそうしてください。でも盾をもっと尊敬することを学びましょう。すべての剣は死を求めて歌いますが、盾は生命を表しています。それは保護し、防御します。剣は必要なものですが、盾は高潔なものです。それを忘れないでください。」

ブリンは手に持った武器からもう一方の腕に固定された盾をちらっと見た。彼女は、復讐に燃え怒りに満ちてウツクの落伍者達と戦った際に、一度もそれを使用しなかったことに気づいた。剣しか使わなかった。

彼女は剣を鞘に戻し、息を吸って、ジェロルドを見下ろした。

「私はまだ何も約束しません。」彼女は言った。「でも、この追跡を中断します。ただの復讐の探求は、良い結末にならない。今ならわかります。私はかつての指導者、アリスを探しだし、巡察官からの辞任を正式に申し出ることになります。それからハイモントに行き、叔母と話します。神が望むなら、私たちはこれを解決することができるでしょう。しかし、何が起ころうとも、ジェロルド、私は自分の義務を果たします。そのことを、あなたに誓いましょう。」

## ガラデンの物語

「こっちだ。」

マティスはあちこち繁っている草藪を見て立ち止まり、ガラデンを見つめた。

「本当か？」

そう言いながら、彼はエルフの目が彼の唇に焦点を合わせ、各単語を読んでいるのを見た。エルフは彼らのメリットを一瞬考えたようで、それから一度うなずいた。

「ああ。」

彼はマティスが答える前に向きを変え、再び森の奥深くに進み始めた。マティスは追いつこうと急ぐ前に、そっと誓った。

「呪わないでくれ。」マティスが彼のそばに追いついた時、彼の方を見ないでガラデンはつぶやいた。

「私が誓ったことをどうやって知った？」マティスは尋ねた。

「人は予測可能なものだ。」

マティスは、気まずい思いがわき上がるのを全力で無視した。彼はいまだにエルフの風変わりな道連れに慣れつつあるところだった。マティスのレンジャー隊長が彼をファーレンジャーの支援任務に割り当てて以来、彼らは一緒に追跡をしていた。このエルフは、一人でレンジャーの前哨基地にやってきて、開拓地の古代の誓約を呼び起こして、ケルの侵略以来各地で暴れ回っているウスク・イランの部隊を追跡するのに助けるようにヒューマンに要求したのだった。隊長は、ガラデンに同行するためにマティス 1 人を行かせることで、誓約を遵守した。

マティスは隊長の選択に半ば興奮した。ファーレンジャーは南部の男爵領の人間にとって、ほぼ神話的な存在だった。伝説によると、彼らの遠征隊はラタリの国境地帯をはるかに超えて進み、人が住む土地を襲う前の野生のウスク達をそこで狩り殺したとのことだ。

エルフの近くにいる、マティスはガラデンの聴力が弱いことが気になった。ヒューマンのレンジャーであるマティスは、右のほうで何かパチンという音が聞こえたら、すぐさま弓に矢をつがえて、神経を集中させて森の中で動いている何かを探した。しかし、ガラデンはまったく無関心であるように見えた。仲間のレンジャーが気づいた音には気づかなかつたように歩き続けた。マティスは少しその場に立ち止まり、周囲の草木を注意深く眺めてから、顔をしかめて仲間の後を追った。

このやつれた姿のエルフが門に現れた夜、マティスは人間のレンジャーとキャンプファイヤーの周りを囲んで、ガラデンの話を聞いていた。何年もの間、彼は彼の家族イヴナリラムと、テリノス南部と東部の国境をパトロールする人間のレンジャー部隊を含む、ラタリの他の者達との間の連絡役をしていた。それは、ウスクの力が急に増し、ファーレンジャーの多くを殺戮する前のことだった。その後ガラデンは話し合いをあきらめ、彼の同族を殺した連中を狩ることに専念した。

マティスは最初の夜に、そのことについて彼に尋ねた。炎の光の中でエルフの目は全てを見通すかのように思えて、不快に感じた。ガラデンはしばらく黙ったあと、きしるような低い声で話した。

「私を生かすために他の者達が死んだ。私はその犠牲を無駄にしない。ウスクの死のために私は存在する。」

マティスはそれ以来、復讐への剥き出しの欲求を露呈したそれらの言葉について考えてきた。ガラデンは、彼の過去についてのさらなる質問には答えようとしなかった。実際それ以来、追跡に関する情報を伝える時以外、彼はほとんど口をきかなかった。

別の枝を踏む音が聞こえた。マティスは再び立ち止まった。今回は、右のほうで木々の間を素早く動く何かの影を確かに認めた。

「ガラデン」歩き続けるエルフの肩に手を置いて、彼は囁いた。

「止まれ。」

ガラデンはついに立ち止まり、マティスを振り返った。

「ヤツらがいる。」と彼は少し眉をひそめたエルフに口を開いた。マティスは、自分をガラデンと一緒に送り出したことで、隊長を心の内で呪った。物語では、ファーレンジャーは超自然的なハンターであり、彼らの聴覚障害は何の問題でもないことになっていた。だが、ガラデンは周りに迫る危険に気づいていないようで、彼は実際にはなんの役にも立たないように見えた。

その時エルフが動いた。

マティスは自分が矢をつがえる速さに誇りを持っていた。彼は心臓が2回拍動するうちに矢を弦につがえて目標に射ることができた。だが、彼はガラデンをまっすぐ見ていたにも関わらず、放たれたアシュウッドの矢が実際に彼の顔をかすめて飛んでいくまで、エルフが矢筒から矢を取り出し、弦につがえ、そして放ったのに気がつかなかった。

一瞬、彼はエルフが彼を狙ったと思ったが、遠くで矢が肉に当たるおなじみの音が聞こえ、続いて痛みの叫び声が聞こえた。彼は緑のレンジャーマントをひるがえして振り返り、本能的に自分の矢筒から矢を掴んだ。彼の後ろには、入れ墨をした半裸のウスクバーサーカーが、胸深くに埋まったガラデンの矢を握りしめ、下草の上に倒れていた。彼は死ぬ時に喉をダイヤモンドファングの蛇のようにガタガタとならした。

それが始まりとなった。周り中に雄叫びが上がり、藪から傷跡だらけの体に粗野で邪悪な刃を持った姿が飛び出してきた。それは待ち伏せだった。そして彼らは自らその中に飛び込んでしまったのだ。

マティスはうなり声を上げてこちらに向かってきた最初のウスクに矢を放ち、その顔面を撃ち抜いた。彼が2本目の矢を放とうとすると、そのけだものは致命的な傷を掴んで、咆哮して倒れた。

遅すぎる。デーモンウォーシッパーが1体、切り欠きのある斧を振り上げて彼に向かってきた。興奮して充血した目、鋭く尖った歯、肉屋のような臭い息をしている。

だがウスクは斧を振り下ろすのではなく、彼に激突した。マティスは背中の木に押しつけられ、ウスクとの間に挟まれた彼の弓は折れそうになった。バーサーカーの臭い体と絡み合っていると、マティスはガラデンの矢がその脇腹から突き出ていることに気付いた。ウスクは彼に倒れ込んだ。

マティスはウスクを振り払い、長く曲がった鋼鉄のハンティングダガーを引き抜いた。だが突然、周囲に敵がいなくなったことに気がついた。何十人もいた敵は、周囲の踏みつけられた下草のいたるところに散らばって倒れていた。彼が倒した1体以外は、みな白い羽根がついた矢が突き刺さっている。レンジャーは目を見開いて、ガラデンに目を向けた。

エルフはこちらを見ようとしなかった。彼は矢をつがえたまま静かに立ち、周囲の森の中を注視して、猟師の姿をしたクルノスの像のようにすべてのメンナラを探していた。

マティスは彼の視線を追いかけようとしたが、何も見えなかった。森は待ち伏せの前と同じように、静まりかえっていた。戦闘は30秒くらいしか続かなかったようだ。

「ガラデン。」彼はエルフの注意を引くために手を振った。彼はマティスを見て、ゆっくりと、指を一本唇にあてた。

「静かに。」

マティスはそのジェスチャーの意味がほとんど理解できなかった。だがその時、凄まじい金切り声が森を切り裂いた。その騒音は激しい痛みを伴い、マティスは弓を落として、手で頭を覆った。その叫び声は頭蓋骨に突き刺さった短剣のようで、鼓膜が破裂しそうになった。彼は散らばったウツクの死体の中で膝をついて、痛みでうめき声を上げていた。

ありがたいことに、金切り声が止まった。だが耳鳴りは続いていた。頭の中の痛みを耐えながら、彼は弓を拾おうとした。その時、木々の間をこちらに向かって進んでくる何かを感じた。彼はなんとかそれを見上げ、そして恐怖で凍りついた。

ウスクの女が彼に向かって忍び寄ってきた。背が高く、灰色の肌で、粗い革と毛皮で覆われている。彼女の体のむき出しの部分は、血で書かれたマーキングで塗りつぶされ、彼女の痩せた、残酷な顔は、頭蓋骨に似せて塗られていた。彼女の頭は、雄羊のように眉から一對の角が突き出していた。

それはブラッドウィッチ、インフェルナエルの巫女、デーモンの配偶者だった。

彼はなんとか弓を握り、震える指で矢筒から矢を取ろうとした。その時ブラッドウィッチはまた金切り声を上げた。今度はマティスはすべての聴力を失った。苦痛はとても激しく、彼はほとんど気を失いかけた。デーモンの邪悪が注がれた遠吠えは、彼の感覚を限界まで打ち砕いた。彼は耳を押さえている自分の指が血だらけなのに気がついた。

ウツクは彼の上に立ち、邪悪で湾曲した短剣を毛皮から滑らせた。彼女は叫ぶのをやめていた。だがそれはもうほとんど関係なかった～マティスの聴覚はすでに失われていた。彼は片手を弱々しく上げて抵抗しようとしたが、彼の頭は鈍くぼんやりしていた。

音は聞こえなかったが、次に起こった事を彼は目撃した。白い羽根の矢が飛んできて、ウスクに突き刺さったのだ。ウスクが最後の瞬間に体をひねったため、矢は胸ではなく肩に突き刺さった。ウスクの魔女が怒りの表情で顔をゆがめた瞬間に、何かがマティスに横から激突して、彼を吹き飛ばした。

それはガラデンだった。ブラッドウィッチの叫び声の影響を受けていないファーレンジャーは、2本のミラーブレードを両手に打ち寄せた。ウスクは1番目と2番目の攻撃を短剣で受け流した。その素早さはエルフとほぼ互角だった。ウスクは再び叫ぼうと口を開け、マティスの耳鳴りがひどくなった。その時、ガラデンのナイフが魔女の喉を切り裂いた。

周囲の木の葉に血が飛び散った。ウスクの金切り声は途中で途切れ、魔女はガラデンを驚愕して眺めながら地面に倒れた。

マティスは立ち上がろうとしてうめいた。ガラデンは彼の前にひざまずき、そっと手を伸ばして血まみれの彼の手を耳からはがして引っ張った。彼はエルフを見上げて、彼の唇が動いていることに気づいた。

ガラデンの言葉を唇の動きで推測しようとしたが、彼にはできなかった。ガラデンはマティスが聞こえていないことを理解して、代わりに身振りで何かを伝えようとした。だがやはりマティスには理解できなかった。彼はなんとか首を横に振った。

ガラデンはマティスを引っ張って立たせ、ウスクの死体を調べに行った。彼は死体から、壊れたものを除き、一本ずつ丁寧に矢を引き抜いた。

マティスは、血が飛び散った木の樹皮に体をもたれかけた。痛みは残っているが、ゆっくりと耳鳴りは消え始めた。彼はどこか頭上で鳥たちのさえずり声が聞こえることに気がついた。

ガラデンはブラッドウィッチの死体にしゃがみ込んだ姿勢で彼を見上げ、最後の矢を引き抜いた。

「聞こえるか？」彼は尋ねた。彼の声はくぐもっていたが、聞こえた。マティスには、ぼろきれを耳に詰め込んでいるように感じた。

「ああ」彼はなんとか咳払いをして言った。

「ありがとう...私を助けてくれて。」

ガラデンは何も言わず、木の葉で矢をきれいに拭き、矢筒に戻した。

「もう少しでやられるところだった。」マティスは続け、殺されたブラッドウィッチを物憂げに見つめた。

「いや違う。」ガラデンは立ち上がって言った。「私は彼らの存在に気づいていた。私は単に彼らに逆を信じてもらいたかったのだ。自分たちが有利だと思っている敵を倒すほうが簡単だから。」

「それで、君は私を餌として使ったのか？」マティスは眉をひそめながらゆっくりと尋ねた。

「私たち二人を餌として使った。それでうまくいった。この部隊が壊滅した今、この地域での私の任務は完了した。」

マティスは怒りを鎮め、ふらつきながら慎重に身をかがめて、落とした弓を拾い上げた。弓の弦を外しながら、彼はブラッドウィッチが死んだ後のことを思い出していることに気づいた。

「どうしたら唇を読むだけで、私が言っていることを完璧に理解できるんだ？」彼はその逆の立場の時、まったく理解できなかったことを思い出しながら尋ねた。

「練習。」とエルフは簡潔に答えた。マティスはうめき声を上げ、森を一瞬見つめた。

「私にはできなかった。」と彼は言い、絶望的な戦闘と彼自身とファーレンジャーの違いについて考えた。

「聴覚は不可欠だ。レンジャーがそれなしでやれるとは思えない。」

返事はなかった。彼の聴覚がまたなくなったかどうか疑問に思って、彼は眉をひそめて振り返った。彼が動いたとき、小枝が足下でパチンと割れる音を聞いた。だがエルフの姿はなく、殺されたウスクの死体だけが残されていた。ガラデンは行ってしまった。

## サイラスの物語

その鳥はかつては美しかったに違いない、サイラスはそう思った。その魔法の鳥は召喚室の中央に設けられた石の台座の上のとまり木で、背を丸めてじっとしていた。その体の炎はほとんど消えていたが、わずかに残された炎が折り畳まれた羽根の先で弱々しく燃えていた。その羽毛は灰色にすすけて、目はうつろに閉じられていた。

「フェニックスですか。」サイラスは言った。彼の指導者であるエレメンタリストのグレイズドン教授は、調べていた書物から顔を上げて少し顔をしかめた。

「そうだ。」また書物に目を戻しながら教授は言った。

サイラスは台座に近づいた。フェニックスはくすんだ羽毛を少し逆立てただけで、彼らの会話には何も反応しなかった。

彼はその生き物が気の毒に思えて胸が痛んだ。鳥は物理的にも魔術的にも捕らえられていた。片方の足はとまり木に繋がれ、エレメントの液体（アクオス）を満たした6つの皿がとまり木の下に並べられ、フェニックスの体内を流れる魔力を吸い出していた。彼は子どもの頃から両親のやるタカ狩りに何度も参加してきたから、魔法的だろうとなかろうと、その猛禽が苦しんでいることはわかった。このフェニックスは死にかけていた。

「先生はこの鳥を治せるのですか？」彼はグレイズドンに聞いた。

教授は答えなかった。彼は控え室の反対側にある書見台の向こうに立っていた。グレイヘイブンで一番高い塔にある大学の中でも一番高いところにあるこの部屋は、ドーム型で天井はガラスで覆われており、円形劇場のような形をしていて、周囲に石の椅子の列が少しずつ高くなり、中央が一番低くなっており、そこに台座と囚われの鳥がいた。日中この場所は講義室となっていて、学生達が慎重に選ばれたエレメントエネルギーの貯蔵物からエネルギーを出したり入れたりする実習に使われていた。だが今晚は、サイラスとグレイズドンと病んだフェニックスだけがいた。

サイラスは寝ていたところを教授に個人的に起こされ、着替えをしたらすぐにこの塔に連れてこられた。この呼び出しはまったく予想外のことだった。グレイズドンは厳格な教師かつ有能なエレメント魔術の使い手で、大学の教員という仕事を真剣に考えていた。1年生の時サイラスは、グレイズドンのほとんどの授業で中くらいの成績だった。だがエレメントのエネルギーを実際に使い、生体にそのエネルギーがどう作用するかを学ぶ個人講義になると優秀な成績を取めた。彼は自分がゆっくりとでも上達していると感じていたが、厳格な教師の存在はやはり恐ろしかった。

「その皿に触らないように。」グレイズドンはまた書見台の書物から視線を上げて、台座の上のアクオスがに入った皿にサイラスが近寄っているのを見て、ピシッと言った。サイラスが後ろに下がると、グレイズドンは読んでいた書物をドサッと閉じて、杖を手にサイラスに近寄った。

サイラスは慌てて自分の杖を握りしめた。この杖は彼が大学に入ってからすぐに、自分で節くれだったアッシュウッドの木を彫って文字を刻んで作ったものだった。彼は急にもの悲しくなって、咳払いをした。

「君は拘束チャームの呪文を知っているかね。」グレイズドンは尋ねた。フェニックスのわずかに残った炎が放つ弱い光は彼の皺だらけの老いた顔を浮かび上がらせた。

「はい、先生。」頭の中で急いで呪文を思い出しながら、グレイズドンに渡された空気のエレメントが入った小瓶を握りしめて、サイラスは言った。

「その時がきたら、君にその呪文を唱えるように言う。」台座から無力化石を1つずつ取り除きながら、グレイズドンは言った。「フェニックスが生き残るためには、私が作業をしている間、君がそのエネルギーをつなぎ止めておかななくてはならない。わかったかね。」

「はい、先生。」サイラスは繰り返した。神経が高ぶるのを感じながら、彼はフェニックスを見下ろした。グレイズドンはこのような生き物を召喚することができるという噂を聞いたことはあった。これまではサイラスはそ

んな噂を半分しか信じていなかった。グレイズドンが今晚彼を呼び出し、何かの手当をしなければフェニックスが死んでしまうと差し迫った口調で告げるまでは。サイラスが実験について尋ねると、彼はこの生き物の命を救おうとしているのだとだけ告げた。サイラスは、教授の言っていることを信じて良いのか悪いのか、決めかねていた。

「あの・・グレイズドン先生、これは試験なんですか？」サイラスはためらいつつ尋ねた。

グレイズドンはフェニックスのうなだれた頭越しにサイラスを見て、わずかに笑みを浮かべた。

「見習いインダール君、これは正式な試験ではない。非公式な試験とは言えるだろうが。君は生命エネルギーとエレメントについては、それなりに理解しているようだ。私が主呪文を詠唱している間、誰か拘束呪文を唱えてくれる助手が必要なのだよ。うまくいけば、君にとっても利益になるだろう。」

サイラスは了解したとうなずき、自分の杖を少し強く握りしめた。グレイズドンは最後の無効化石を取り除き、それらを自分の書見台の上に置いた。そして台座に戻り、ローブの袖から卵形の物体を1つ取り出した。片手でそれを掲げながら、彼はサイラスにうなずいた。

「呪文を始めたまえ。」

サイラスは息を吸って、アネモスの入った小瓶を開けて、その中に息を吐きかけた。それはメンナラが持つ自然の機能から魔力を引き出す神秘的な特性を利用したエレメント魔法だった。その小瓶から吹き出す突風を利用して、彼はフェニックスの魂とその魔法特性をつなぎ止めておくことができた。エネルギーがうねりを上げて湧き上がるのを感じ、呪文を唱えながら彼は自分の杖に意識を集中させ、それを魂が通る経路にした。

サイラスの呪文がフェニックスに届くと、鳥の周りを淡く光るエネルギーの球体が包み、フェニックスは弱々しく鳴き声を上げた。サイラスは一瞬目を閉じて、また呪文を繰り返して、魂をもっとしっかりつなぎ止めようとした。彼が目を開けると、グレイズドンは持っていた楕円形の物体をフェニックスの下に置いていた。それは何かの卵で、表面に黒い斑点がまだらになっていた。

「サラマンダーの卵だ。」彼の視線に気がつき、グレイズドンが言った。「これがフェニックスの炎の力を封じ込める。」

グレイズドンが次に彼自身の呪文をつぶやくと、卵は深い白色の発熱で輝くように見えた。

サイラスは突然恐るべきことを理解した。フェニックスの下に置かれている水エレメントのエネルギーであるアクオスが入った皿は、鳥の魂のバランスを調整するためのものだと彼は思っていた。だがそうではないようだ。魔法の液体は炎のエッセンスを吸い出していた。そしてサラマンダーの卵はフェニックスの体内に残った炎の魔力を引き出すために使われていた。

フェニックスは絶叫した。その翼と背中に沿って炎が再び燃え上がり、一瞬輝いた後、まるで下に置かれた卵に向かって炎を吸い出されたかのように暗くなった。卵は炎で覆われて輝いた。グレイズドンは呪文を唱え続け、その瞳は炎を映して輝いていた。彼は捕らえられたフェニックスの上に手をかざし、その炎を吸い出して卵の中に封じ込めようとした。

「止めて下さい！」恐怖で教授への服従を忘れ、サイラスは叫んだ。呪文を邪魔されてグレイズドンは顔をしかめたが、彼の手の下をまだ炎は流れ続けている。彼は炎を映した瞳をサイラスに向けた。

「この生物の魔力は内因性のものだ、サイラス。」彼はフェニックスの苦痛のうめき声にかぶせて宣言した。「私はこの能力を利用できるよう、何十年も研究してきた。私や君のような普通の人間が、この生物のように、エレメントの元も、ルーンバウンドの破片も、呪文の詠唱もなく、本能的に転換点に直接作用することができたらと考えてみたまえ。もう少しで、その方法がわかるのだ。この鳥を治すことができれば、私の研究に大きな助けとなる。」

「理解なんてできません。」急いでサイラスは言った。「それに先生は治してなんかいない。殺しているです。」

「私は助けようとしているよ。」重々しくグレイズドンは言った。「鳥がこれを生き延びることができたら、そ

の余剰魔力は安全に卵に封印されるだろう。これ以上苦しめたり弱らせたりしなくなる。」

「違います。」サイラスは言って、深く考えもせずに卵に向かって突進した。だが、グレイストンの詠唱が聞こえたと思うと、サイラスの手は何か硬い物にぶつかったかのように空中で停止し、激しい痛みが腕を走った。彼の指は卵から数インチのところまで止まって震えていた。だが捕らえられ苦しむフェニックスと卵の間の炎の流れは止まった。

以前にも増して強力なエレメントのエネルギーが再び湧き上がり、サイラスはそのエネルギーを周り中に感じた。控え室はメンナラ自体の怒りで満たされ、石が震えドーム型の天井のステンドグラスはガタガタと音を立てた。そのエネルギーのうねりは彼の杖と体の中を流れ、彼の手は魔力を吸い取る卵とフェニックスのエネルギーの間を走る導管のような作用をした。

いまさらながら、彼は自分がこの生き物に最初にかけた拘束の風呪文を解除していなかったことに気がついた。彼はその力場の範囲に踏み込んでいて、今やフェニックス自身のようにがっちり捕らえられて身動きできなかった。彼の中のエレメントエネルギーも妨げられ、今や彼の炎までがサラマンダーの卵に向かって吸い出されていた。

「君は何をしたのかね！」グレイストンがわめき、石の台座の側面を彼の杖の底で殴り、部屋全体を破壊しようとしているエネルギーを分散消滅させようと試みた。「この馬鹿者！」

「もう・・・たくさんです・・・」サイラスはなんとかしゃべった。エレメントのエネルギーが彼の体の中に跳ね返ってきて、フェニックスを拘束している限局性の風が吹き上がり、サラマンダーの卵が発する熱と共に彼のローブ、頭髪、ひげなどに絡みついた。

「その接触を解除しないと、死んでしまうぞ。」サイラスがエレメントのエネルギーに捕らえられてしまったのを見て、恐怖に駆られてグレイストンは叫んだ。「杖を離して後ろに下がらたまえ！」

サイラスもそうだった。サラマンダーの卵は燃えるように熱く、彼の指のほんの先にその熱を感じる事ができた。それは彼の指から生命力を吸い取り、焼け付くような感覚が彼の腕から上の方に向かって広がっていた。彼は恐怖でパニックをおこしたが、何か他のことも感じる事ができた。フェニックスの炎のエッセンスと彼自身の炎のエッセンスとは、サラマンダーの卵の中心に引かれていく過程で混じり合い、1つになっていった。

彼の杖の先端は炎に包まれた。彼は卵が炎を貪欲に吸収するのと対比して、同じ炎が彼の体の中を広がっていくのを感じた。それはフェニックスの炎が彼自身のものと混ざり合ったエッセンスだった。炎が羽根から湧き上がり、その光がフェニックスの目の中に入るとさらに燃え上がった。フェニックスの目はサイラスをじっと眺めた。

「私が接続を断ち切ったら・・・鳥は死んでしまいます・・・」サイラスは歯を食いしばって、なんとかしゃべった。

「断ち切らなければ、君も鳥も死ぬぞ！」杖をかかげてグレイストンは叫んだ。彼はフェニックスがサイラスとこれ以上融合する前に殴り殺そうとして、杖を振り上げた。

そうさせるわけにはいかなかった。サイラスはその生物の魂を感じることができた。その名前～インドリス～も知った。その燃えるコア、その考えることも分かった。彼女は怯えているのと同じくらい反抗的だった。その最後の炎を卵に奪われることを拒み、なんとかして逃げ出してもう一度空に舞い上がり、束縛されない転換点の魔力が再び体内を流れるのを感じたがっていた。彼女はこんなふうに捕まって束縛され、炭化した羽根とうつろな骨になって台座に繋がれたまま死にたくはなかった。

サイラスもそんなことは許せなかった。この瞬間、こんなに気高い生物が死ぬのを見るくらいなら自分が死んだほうがまだと彼は思った。融合するエネルギーから自分の魂を引き抜く代わりに、彼はもう一回卵に向かって突撃した。

最初の時に彼を弾き返したバリアーは、今回はフェニックスの魔力で満たされた彼を止めることは出来なかつ

た。彼は歯を食いしばって呪われた卵に突進した。苦痛と断固とした決意の雄叫びが震える室内にこだました。彼の指が卵をつかんだ。卵の周りはフェニックスの新たな怒りで炎に包まれている。彼女自身の叫び声はサイラスの声と混じりあったようになり、その衝撃で天井のステンドグラスに巨大なひびが生じ、割れ目が稲妻のようにドームの下まで走った。

バリッと音を立ててサイラスの手の中で卵は砕けた。その中心はサイラスの体自体が中継したフェニックスの怒りによって、焼き尽くされていた。彼の手の中で卵は粉々になり、そのエネルギーが解放された。サイラスは後ろに吹き飛ばされ、円形劇場の一番下の列に叩き付けられ、息ができなくなった。彼は自分の杖をなんとか落とさず握りしめていたが、その炎は弱々しくなってもまだ燃えていた。

もうろうとしながら、彼は煙の中、あたりを見回した。そしてインドリスが復活するところを目撃した。フェニックスは立ち上がり、彼女の下卵と皿は砕け散り、彼女の魂と肉体はグレイストンのワナから自由になった。広がった羽根は光り輝く炎に包まれ、その体から発する白い熱は部屋中を照らし出した。悦びの鳴き声をあげて鳥は舞い上がり、ひびの入ったドームの下を飛び回ると、彼女が発する光でステンドグラスは輝いた。初めて彼の傷ついた魂は、空を飛ぶ悦び、束縛されない自由への興奮で満たされた。そして彼は立ち上がり、意識は復活した。

彼は卵を掴んで握りつぶした方の手を持ち上げた。少しずつ弱まっていく熱の他には、手にはなにも変りがなかった。彼

はその手の向こうの部屋を眺めた。

全てが変わっていることに彼は気がついた。以前は見えなかったいろいろな色のエネルギーが彼には見えた。それは部屋を揺さぶる魔力の爆発の残渣だった。彼の周りはエレメントで取り囲まれていた。彼の精神はそれらの存在を感じることができた。手を上げてエレメントに触れると、それは万華鏡のような渦をつくり、彼の命令でどこへでも向けることができた。

彼は今やかつては想像もできなかった力を手に入れた。彼とインドリスの間の絆が与える力だった。

グレイストンは爆発を生き延びていた。彼は膝をついてあえぎ、彼が杖で召喚した防御力場は消えかけていた。彼は飛んでいるフェニックスを見上げたが、鳥がサイラスの方に舞い降りてくると、生徒の目を見据えた。彼のまなざしは怒りに燃えていた。

「なんと酷い・・・」彼はなんとか声に出した。「屈辱だ。私は全てをコントロールしていた。この生き物は回復しただろう。だが、君の邪魔のせいで全員が死ぬところだったのだぞ。」

「インドリスのような生き物が抜け殻にされるのをただ見ているくらいなら、そのほうがましです。」サイラスは答えた。確信を持った声は、自信に満ちていた。話しながら、インドリスが降りてくるのを感じて、彼は手を前に差し出した。魔法の猛禽は彼の手首の上にとまり、そのかぎ爪は腕甲に食い込み、その燃える羽毛から炎が筋を引いて広がった。だがサイラスはその熱をもう恐れなかった。彼らの炎は今や1つになったのだ。

グレイストンは燃えるフェニックスとかつての弟子の杖から発する炎の光景を眺め、言葉を考えているようだった。「これは全てを変えてしまうだろう。」彼は言った。「もし大学当局が知ったら・・・」

「大学はこのことを知らなかったのですか？」サイラスは尋ねた。グレイストンは顔をしかめ、首を振った。

「知らなかった。だが彼らもこの場所で起こったエネルギーの発散を感じたはずだ。そして、すぐに君が新たに手に入れた力について証言するだろう。何が起こるにせよ、サイラス、君はこの新しい魔力には慎重でなくてはならない。よい目的に使えるよう、よく研究しなさい。このような贈り物はめったにあることではないのだから。」

## ヴァエリクスの物語

タマリアの通りを熱い風が吹き抜け、木製のよろい戸や店の看板をガタガタさせた。自由都市の住人達は汗をかいて、路地裏の日陰や屋内に逃げ込んだ。だがこの暑さは、ブラックエンバーゴージの灼熱に比べたらなんでもなかった。

ヴァエリクスは、その長い手足とウロコで覆われた体に青いドレスと白の下着だけを着て、タマリアのレッドブリッジ近くの、街中からやってきた商人や旅人、使節たちでごった返す市場の隅に立っていた。全ての道はタマリアに通じる、と言われていた。この広場を見渡す場所に来てから、ヴァエリクスはヒューマンやドワーフ達（ほとんどがダンワー出身）、ハイリンクス商人の3人連れ、オークの傭兵の一団などを見かけた。だがこれらの者たちはヴァエリクスほど人々から避けられてはいなかった。タマリアのような場所ではドラゴンハイブリッドも完全に忌避されるわけではないが、かといって歓迎されているわけでもない。

そのような世間の態度は決して珍しいことではなかった。ドラゴンハイブリッド達は他の種族が自分たちのことをどう思っているか気にすることをずっと前にやめた。だが、タマリアの通りの暑さと感覚を麻痺させるような市場の騒音や臭いや景色の中でも、記憶は北部の冬のように冷たく鋭く彼を切り裂いた。彼はモルテンヒースから追放されたのだった。ドラゴンロードレビラックスに仕える仕事を解雇され、打たれて翼を切られ、同族たちから追い払われた。

それはある夢から始まった。それはヴァエリクスのその後の人生の暴風における最初の雨粒の一滴にすぎなかったが、ドラゴンハイブリッドには普通なことだと言われた。間違っていると。だが、彼は自分が経験したことの正しさを否定することはできなかった。ある晩、彼が寝ていると、同族の大虐殺のシーンが胸に浮かんできた。あまりにもリアルなので、すでに起きたことを見ているようだった。レビラックスに忠誠を誓ったドラゴンハイブリッド達にとっては恐ろしい未来だった。

彼にどうすることができただろう。この幻視のことを誰にも話さず、他の同族と一緒に確実な破滅に向かうべきだったのか。

ヴァエリクスの前方の人混みの中、市場の中央近くに作られていた酒保商人のテントの中から2人の姿が出てきて、カースリッジ男爵領の使節団とその護衛が大きく道を空けた。その者達はドラゴンハイブリッドだった。一人は赤、もう一人は青のウロコで、どちらも長い手足の体に軽い革鎧を装備している。彼らは旅人で重い荷物を背負い、買ったばかりの動物の生すね肉を手を持っていた。周囲が自分たちを避けていることに気づかぬようすで、朝ご飯をかじりながら彼らは会話していた。

ヴァエリクスは彼らがこの広場に入ってきた1時間前から、彼らに気づいていた。そのせいで彼は広場の端に身を隠していたのだった。この2人と接触する気はなかった。今は余計なことに気を取られなくなかった。

追放されて以来、自分についての噂が広がっていることを彼は知っていた。いわく、ドラゴンロードレビラックスに忠誠を誓っていた上級アドバイザーでドラゴンハイブリッドの教師だった者が、裏切り者となって名誉剥奪され追放された。当初そのショックは耐えがたいものだった。彼は誰にも会わないように身を隠し、夢で見たことを忘れようとした。だが結局そのようなことは不可能だと悟った。レビラックスに仕えるドラゴンハイブリッド達は、ドラゴンロードが用意した大虐殺の未来から逃れるように説得できない限り、破滅する運命なのだ。彼がタマリアで北のフロストゲートに向かうキャラバンを探しているのは、それが理由の1つだった。北の男爵領でドラゴンハイブリッド達を見つけ、レビラックスの教えを食い止めるために。

食べながら人混みの中を歩いているハイブリッド達は、次第にこちらに近づいてきた。彼らの姿を見ただけで、ヴァエリクスは恐れを感じた。そんな必要はないのに。かつて翼がついていたところに彼は幽霊痛を感じた。彼の翼はレビラックスの上級副官ゼニスに切り取られたのだった。

1人のハイブリッドが顔を上げ、ヴァエリクスと目が合った。その2人がこちらに気づき、素早くジェスチャ

ーを交わして近づいてくるのを見て、彼は気が重くなった。ヴァエリクスはその場に立ち、自分の鉄棘の戦鐘の杖を握りしめた。

2人はヴァエリクスの前まで来て、角の付け根に手のかぎ爪をこすり合わせる敬礼をした。

「強きウロコの方、我らの非礼をお許し下さい。」1人が言った。「我らはここ何ヶ月も同族に会ったことがなかったものです。いかがお過ごしですか。」

「あなたはまるでドラゴンロードかその右腕に対するように礼をつくされる。」返礼としての角には触らず、ヴァエリクスは彼らを観察した。「私はどちらでもない。」

2人は目を合わせて、青いウロコが口を開いた。

「私はダリクス、そしてこれは私の卵兄弟、ファルザールです。」赤いウロコのファルザールはうなずいて、もっと普通の挨拶をした。

「お許し下さい。お気を悪くさせるつもりはありませんでした。」青いウロコがまた言った。

「別に気にはしていない。」ヴァエリクスは素っ気なく答えた。2人は居心地悪そうにまた目を合わせ、またダリクスが言った。

「詮索するつもりはないのですが、もしかしてあなたは予言者ヴァエリクスではありませんか。」

ファルザールが連れに怒った顔を向けたのにヴァエリクスは気がついた。彼は肩をすくめて言った。

「そう、私はヴァエリクスだ。だが私は予言者ではない。最近同族は私のことをそう呼んでいるのだろうか。」

「一部の者は。」ファルザールはダリクスが口を開く前に言った。「でも全部ではない。」

「レビラックスを信じる者達はあなたの言うことを否定しています。」今度はダリクスが背が低い赤いウロコの連れに怒った顔を見せて言った。「でも全員がドラゴンロードのいいなりではありません。私はあなたが言ったことを信じています、ヴァエリクス。」

「それで、私はなんとしたことになっている？」ヴァエリクスは2人に余計な情報を与えないように尋ねた。彼は時には自分が夢に見たことを同族の者に話して、レビラックスが計画している破滅的な未来から逃れるように説得する必要があることがあった。だが、それを望まずただ平穩に過ごしたいと思う者もたくさんいた。ゼニスのかぎ爪がウロコに突き刺さる感触、刻印を焼き付けるコテの熱さ、舌を二つに切り裂くナイフ、これらの記憶はまだ生々しすぎた。ヴァエリクスは、レビラックスと彼女に従う者達にもっと訴えかける勇気をもたなくてはならないと、分かってはいた。だが、それは難しかった。難しすぎた。

「あなたは予知夢を見ました。」ダリクスは初めためらうように言った。だが次第に確信をもって話し続けた。「あなたは同族が虐殺されるところを見ました。ドラゴンハイブリッドの破滅、レビラックスが約束していることと正反対です。あなたは彼女の教師の一人でした。真実でなければあなたがそんなことを言うはずがありません。」

「たしかに、私はあれを見た。その通りだ。」ヴァエリクスは認めた。「毎晩、あれが真実でなければと願ってはいるが。」

「あれは警告です。」ダリクスが物知り顔でうなずいた。

「いや、可能性にすぎない。」ファルザールが翼をパタパタさせながら言い返した。「レビラックス本人に会って確認しない限り、知りようがないだろう。」

「私の連れは、自分のことをドラゴンロード配下の勇者のように思っているんです。」ダリクスがヴァエリクスにいらついて言った。「彼はもう何ヶ月も、私にレビラックスのところに行こうと説得し続けているんです。」

「私なら、そんな旅をする前に、よくよく考えるね。」逃げ道を残すように気をつけながらヴァエリクスは答えた。「レビラックスは多くを約束するが、なにも与えない。彼女の期待にそむいた者に、正当な裁きが下されることはまずない。」

「彼女は我々みんなを破滅に導くでしょう。」ダリクスは連れを眺めながら言った。

「どちらにしても、我々は破滅の瀬戸際にいるんだ。」ファルザールはビシッと言った。「間違っているかもしれないが、私が聞いた限りでは、レビラックスは我々の唯一の希望だ。彼女は我々に自分たちの土地をくれる。安全と安定を。通りすがりの者からいちいち呪われることのない、我々の国を。」

「偽の希望だ。」ダリクスが訂正し、ヴァエリクスは一步後ろに下がった。「ドラゴンロードが我々に隷属と服従以外のものを与えると信じるとは、おまえは目が見えないのか。」

「我々は望むと望まざるとに関わらず、彼らに繋がっているんだ、ダリクス。」怒りがこみ上げてきてウロコをひっかきながらファルザールが言った。「彼らの運命は我々の運命だ。単に避けて通るなんてことはできない。」

「レビラックスのハイブリッド達はカルト集団みたいなものだ。」ダリクスが言い返した。「彼女は自分の利益のために我々を利用しているだけだ。そして我々を破滅に導くんだ。我々はドラゴンロードになにも負ってはいない。」

「カルトと言ったのに、おまえはこいつのことを予言者と呼ぶのか。」ファルザールが反論した。「君自身の声に崇拜が含まれているのがわからないのか。おそらく、レビラックスの計画は十分な数の同族が彼女に従っていないから、今のところはどうも聞いていないのかもしれない。もっと多くが従えば、成功するかも。」

ヴァエリクスはもう十分に聞いた。彼らの大声はすでに周囲の注意を引いており、それは彼が望むことではなかった。今は、2人のハイブリッドが議論を続けている中、ヴァエリクスはそこから離れて広場を出た。彼は怒り、苛ついていた。彼は自分を予言者とかなにかの幻術師などと売り込んだことは一度もなかった。ドラゴンハイブリッドに迫る危険は、不可知でも秘密でもなかった。それは現実であり、すでに実際におこっていることなのだ。たった今日撃したような論争は、始まりに過ぎない。

歩きながら、彼は決意をますます強くした。

レビラックスは彼女のかぎ爪がとどく全てのハイブリッドを切り裂いてしまうだろう。彼女を止めなくてはならない。ヴァエリクスがやるしかなかった。

## チャンスの物語

最大の脅威は、常に子どもだった。

それがオークであれ、ドワーフであれ、ノームであれ、ヒューマンであれ、自分に忍び寄ることができるのは子どもだけと、チャンスはずっと昔に学んだのだ。

今彼の目の前の廊下には、一人のヒューマンの子どもが立っていた。たぶん6か7歳。長い白のベッドガウンを着て、よくとかした淡い色の金髪を両肩に垂らしている。彼女は瞬きもせず、大きな黒い瞳でチャンスを見上げた。

ハイリンクスにとって、じっと見つめられるというのは攻撃されるのと同じことだった。チャンスはこれまでそうされたことはなかったが、小さな女の子の観察に対して心の奥底で本能的な反感を感じた。彼は女の子をにらみ返した。

「ネコさん？」少女は重々しく言った。

「たぶんね、」チャンスはそのたとえに気を悪くしないように自制して、静かに答えた。彼は自分の尻尾が不安からパタパタ動いていることに気づき、なんとかそれを押しとどめようとした。

「ネコさん……は、壺が欲しいの？」戸惑ったように少女は言った。

チャンスは少女が彼を見つめているのに気づいた瞬間、廊下で凍り付いていた。つまり、台座からそっと持ち上げようとした豪華な金のロリモール花瓶を彼はまだ手に持ったままだった。

「ネコさんは花瓶が欲しい、」彼は肯定した。耳がピクピク動いている。少女は顔をしかめ、指摘した。

「ネコさんは泥棒しちゃダメよ。泥棒はいけないの。」

チャンスはいらいらして、鼻先を覆っている革マスクの内側でそっと牙をむきだした。

「もし……ネコさんはこれを借りたいだけだとしたら、どうだい？」女の子をなんとかベッドに戻そうとして、彼は提案した。

「パパにお願いしないとイケないわ。」少女は冷静に腕を組んで言った。「パパはその二つの花瓶がとても気に入っているの。」

「そうだろうね。」チャンスは言った。この二つの花瓶は500クラウンの価値があると、無法者王子（アウトロープリンス）の用心棒達に脅されながら経験のあるコレクターが鑑定したものだ。それは南西のロリモールから北東のテレグリムに走る違法な通商ネットワークが入手した財宝のうちの一部で、ルーカス・ブレザールが所有する中で最も高価な品だった。

アウトロープリンスは花瓶が再評価されなくてはならない～個人的に～と命令した。それでチャンスとタリがブレザールの屋敷に真夜中派遣されることになったのだ。彼らは骨董品あさりだった。

チャンスはゆっくりと、花瓶を台座の上に下ろし始めた。少女、おそらくブレザールの娘、はそれを見てしかめ面でうなずいた。

「ネコさんはお利口さんね。」彼女は言った。

チャンスはそうでもないよと言おうとしたが、その時ずっと上の階で叫び声が屋敷中に響き渡った。

それはタリだった。

サッと入ってすぐに出る、こっそり素早く。それはタリが言ったことだった。彼らはその晩までに何度も計画を検討し、アウトロープリンスの土地のライブングート脇の放棄された倉庫で計画の一部のリハーサルまでしたのだ。タリはプリンスの手下の泥棒軍団の中で育てられた小柄で肝の据わったヒューマンで、今回ほど大きな仕事ではないが、これまでに何回もチャンスと一緒に泥棒をしてきた。彼女はチャンスよりも年上で、彼よりもベテランだった。プリンスは彼らに任務を与えるときにそのことを強調した。

「運命の女神はいつも俺に幸運を恵んでくれる。」彼は言った。「だから、そのお裾分けをおまえにもくれてやろう、チャンス。それが必要になるだろう。最近ずっと…おまえはついてなかったからな。タリがおまえをリードする。彼女をおれだと思って従え。」

「彼がわざとあんたを見下すように話しているのわかる？」後日、倉庫の中の暗がりではブレザールの屋敷の地図を調べながらタリは言った。

「誰がだって？」チャンスはいきなり話題が変わったことに戸惑って尋ねた。

「アウトロープリンスよ。」タリは言った。彼女の声はチャンスが聞いたことがないほど真剣だった。「あんたが仲間になってからやった離れ業の半分もあたしにはできなかった。運命の女神なんてほっときなさい。あんたはあたしが知るなかで最高の盗賊よ。」

チャンスの耳は面白がってピクピクした。「おれのことを間抜けだと思ってるだろ。」彼は警告した。「もしかすると、プリンスが俺にそう言えとおまえに命令したのかもしれない、テストとしてな。」

タリは手を上げて、「彼はあんたが思っているほど何でも分かっているわけではないわ、チャンス。そこまで全能というわけではないの。」

チャンスはタリから学んだヒューマンの照れ隠しのしぐさとして、肩を小さくすくめてみせた。

「彼がいなかったら、俺にはなにも残らない。」

「それは、彼があんたにそう言ってるだけでしょ？」

「時々はね。」あまりこの話題に踏み込みたくなくて、彼は認めた。「計画の検討に戻ろうぜ。」

「計画なんて単純よ。」タリはそう言って微笑んだ。「サッと入ってすぐに出る、こっそり素早く。」

「泥棒の名誉？」チャンスは聞いた。それはアウトロープリンスの掲げるモットーの一つで、手下どもに「いい」仕事をするよう推奨する矛盾語法だった。有能な盗賊はなによりもまず目標確保を優先する。

「つまるところは、」タリは言った。「泥棒の名誉よ。」

タリの悲鳴のせいで、チャンスはほとんど花瓶を落としそうになった。彼はそれを台座の上に置き、素早く少女を見た。彼女はまだその場所に立っていたが、その大きな目には怯えの色があった。

「ここにいるんだ。」チャンスは言った。「そして、壺を守っていてくれ。」

彼は四つ足になって階段に突進し、灰色の毛がかすんで見える速さで、二回のジャンプで一気に階段を駆け上がった。その先は踊り場で、黒地の木目の床にイシェイム羊の毛皮の絨毯がしかれていて、屋敷の他と同様豪華に飾られていた。彼の非常に鋭い聴覚はタリの叫び声だけでなく、何かが争う音や重い物が落ち下ろされる音なども聞き取った。彼女は攻撃されていた。

踊り場から右の方に別の廊下に通じていた。彼はここに出発する前に調べた建物の見取り図を思い出した。彼は左のドアを開け、屋敷の中央にある図書室の二階を取り巻く回廊に出た。

タリは図書室の一階で、倒れた本棚の残骸の上で革製の上着をつけた用心棒と戦っていた。もう1人の用心棒は倒れていた。そして3人目が棍棒を振り上げて部屋を横切り向かってきた。

チャンスはすぐに棘端投げナイフを全ての指の間に器用に挟んで構えた。そうする間に、右の方で光るものが目に入り、彼は一瞬ナイフを投げるのをためらった。

彼はタリがなにをしようとしていたのか理解した。本棚をよじ登り階段を使わずに上階の回廊に行こうとしていたのだ。彼が入ってきた回廊に、頭上のシャンデリアに照らされて、双子のもう一つの花瓶が台座の上で輝いていた。

彼はまたタリの方を見下ろした。彼女は花瓶のすぐ隣に現れた彼に気がついていて、彼らは一瞬で共通の理解に達した。

泥棒の名誉。目標が最優先。

チャンスは歯をむき出して、最初のナイフを投げた。小さな鋼鉄の逆棘はまっすぐ飛んで、棍棒を振りかぶってタリに襲いかかろうとする男のふくらはぎに突き刺さった。男は痛みに叫び声を上げ崩れ落ちた。タリと取っ組み合いをしていた男は驚いて上を見上げ、チャンスに気がついた。その瞬間、二つ目のナイフがタリの腕をかすって飛び、彼の肩に命中した。

彼女は痛みに呻く敵を振り払い、叫んだ。

「チャンス、気をつけて！」

彼はすでに攻撃が迫っている事に気がついていて、四人目の用心棒が背後の回廊に現れ、怒りで傷跡のある顔を赤くして棍棒を振り上げた。チャンスは体を沈めて横に転がった。直前まで彼が立っていたところの木の手すりには、重い棍棒で粉々に砕け散った。

転がった先には、花瓶を乗せた台座があった。ほんの少し触れただけだったが、花瓶はぐらぐらと揺れて、倒れそうになった。チャンスは何も考えずに、シャドウクロウの籠手がくくりつけられているほうの手でこれをうまくキャッチした。

彼は花瓶を見つめ、何が起こったか理解した。その時、後ろで雄叫びが上がり、彼は尻尾を逆立てて台座を通り越して逃げた。怒り狂った用心棒が彼の後を追い、もう一度棍棒を振り下ろすと、台座は粉々になり花瓶は倒れた。

「くそつたれのゴミ漁り野郎、こっちに来い！」用心棒は怒鳴った。

チャンスは遠くまで行けなかった。彼の前のドアが開き、ブレザールの部下がもう一人現れた。寝ているところを起こされて髪がぐしゃぐしゃの男は彼を捕まえようと向かってきた。

彼は新手と背後から迫る敵を見て、挟まれたことを悟った。

「俺はゴミ漁りじゃねえ。」彼は棍棒を振りかざしている男に言った。「泥棒だ。」

チャンスは花瓶を投げた。

どちらの男も、金色の骨董品がスローモーションのように図書室の高い天井の梁まで飛んでいくのを見つめて、恐怖で叫び声を上げた。

チャンスはシャーッと唸って目にもとまらぬ速さでダッシュした。腕のシャドウクロウが最初の男の太ももを切り裂くと、男はどさりと倒れた。続けて棍棒の男に最後の逆棘のナイフを投げつけ、男の服の袖を壁に串刺しにした。最初の男は傷を押さえ、2番目の男は腕を自由にしようともがき、どちらもうなり声を上げる中、チャンスは背を伸びした。彼は腕を伸ばして、落ちてくる花瓶を驚異的な正確さで受け止めた。

タリはすでに煙幕弾を破裂させ、図書室の一階は灰色の煙で覆われていた。彼女は煙幕の中から出てきて、チャンスが立っている回廊の場所のすぐ下に立ち、彼に向かって手を振った。

「それを落として！」

彼は花瓶の脇を掴んで放り投げ、その後を追って自分も飛び降りた。タリは骨董品を受け止める時、その重さにうめき声を上げた。そのすぐ横にチャンスは四つん這いで着地した。

「窓だ。」彼は煙幕の中、脱出路の方向を指さした。タリは肯いた。

一緒に彼らは走り出し、頭を低くして窓に体当たりした。ガラスは粉々になり破片が飛び散った。チャンスは植え込みの中をころがり、すぐに立ち上がって、タリの手から花瓶が落ちる寸前に受け止めた。

彼らはウェストポートゲートをくぐり、ダックとハープ宿屋裏の路地まで走ってきて、ようやく一息ついた。

「泥棒の名誉はもうたくさん、よね？」タリは息切れしながらニヤリとした。

「おい、俺は獲物を確保したぜ。」花瓶を持ち上げてチャンスは言った。

「アタシの獲物よ。」彼女は修正した。「あんたのはどこ？」

「俺の方には、えらく恐ろしい番人がいたんだ。」チャンスは言って、マスクを引き下げて牙をむきだして彼女に笑って見せた。彼女はぜんぜん信じていない様子で、目をクルクルさせた。

「アタシのことは放っておけばよかったのに。」彼女は言った。「アウトロープリンスは怒るわよ。」

チャンスはしかめ面をした。「彼が気づかないことを願うよ。」沈んだ声で彼は言った。タリは笑って彼の肩をたたき、元気づけようとした。

「あんたはたしかに凄腕の泥棒だけど、チャンス、」彼女は言った。「でも、あんたみたいないい友達がいて嬉しいよ。」

## カーリの物語

そのエルフは細い目でカーリを見下ろして、首を振って言った。

「すまない。仲間にも話してみたが、君は我々のパーティには向いていないようだ。」

彼女は両手をお尻の上に乗せ、ニヤリと歯を見せて尋ねた。「どうして？」

エルフは無表情になり、当たり障りのないことを言っはぐらかそうとした。

「私と仲間達はお互いをよく知っている。」彼は言った。「私達は共に多くの旅をしてきた。」

「でも彼は違うでしょ？」カーリは陰気なエルフの後ろの2台の馬車とそれに荷を積んでいる者達を指さして言った。一番近くの者は、着ている焦げ茶色のローブがだぶだぶな痩せこけてあばた顔の若者だった。エルフがそちらを振り向くと、その若者は馬車に積み込もうとしていた樽を自分の足の上に落として、痛みで悲鳴を上げた。

「ランドン君はグレイヘイブン大学出身だ。」エルフは素っ気なく言い、青年がもう一度樽を持ち上げようともがいているところを見られないようにカーリの視線を遮る位置に移動した。

「彼がエールの樽も持てないやせっぽちの大学生だと？」カーリは言った。

「彼はルーンストーンを持っている。」エルフは囁いた。

カーリはだれでも拾って使うことが出来る外的魔法力源というコンセプトに、たいして驚いたわけでもないように肩をすくめてみせた。

「ごめんなさい。あなた達のパーティにマスターソーサラーがいるなんて知らなかったの。」彼女は叫んだ。

「彼があなた達みんなをそれでインフェルナエルまで吹き飛ばさないように気をつけてね。」

エルフはばかにしてますます厳しい顔になった。

「ヴァイネルベイル行きのメインキャラバンは三日以内に出発する。」彼は言った。「自由都市では、きっと君を雇いたいという者が見つかるだろう。」

「でもスタンニャに向かう人は見つからないわ。」カーリは指摘した。

「それは私の問題ではない。」エルフは言った。「よい一日を、ダンワーの人。」

そのエルフの名はネビュランというらしかった。そして彼の仲間は、コルレンという名のオークと、フレネラという名の女と、気の毒なランドン君だった。コルレンは明らかにパーティの筋肉キャラで、古いチェインメイルと胸にテロール男爵領の紋章が入った傷だらけの長鎧をつけていた。フレネラは、それほど背が低くなくても長い耳があれば、カーリは最初エルフだと勘違いしただろう。彼女がパーティで何の役を果たしているのかカーリには分からなかったが、背中にリュートを背負い、しばしばネビュランのことをうっとり眺めていた。

賑やかなモーウィンドの中心街でこの小さなキャラバンに出会って以来、これらのことをカーリは見取っていた。ここは東テリノスの国境に面した交易の拠点で、建設当初から自分たちを自由都市だと宣言して、東の男爵領中からあらゆる種類の無法者や貧乏人を引き寄せていた。

カーリはそこに仕事とトラブルを探しに来ていた。彼女にとって、仕事とトラブルは同じことだった。ハドランホールドで彼女は錬金術ギルドと鍛冶屋ギルドの両方に所属していたが、ドワーフ社会においてこれは固く禁じられていることだった。両方のギルドにこのことがばれそうになり、彼女の立場はますます悪くなっていた。そこで彼女は、自分の身分を保障する最善の道は、十分な名声と財産を早く得て、告訴されないようにすることだと、少なくとも当初は、決意した。そして自分のハンマーと盾とクロスボウを荷造りして、新天地に向けて旅立ったのだった。

彼女が持っていたのは、思い出せる限り歩き回ろうという衝動だった。彼女の父親はテルグリムの語り部だった。日中彼は、祖先の間に集まってきた者達に、ダンワーの祖先の歴史を教え伝えたが、夜は腕に一人娘を抱いてあやしなげに自分で作った話を語って聞かせた。それは鋼鉄に身を包んだ英雄、恐ろしいドラゴン、狡猾なネ

クロマンサー、有能なルーン職人、キャットフォークの盗賊、インフェルナエルのモンスター達が繰り返し登場する物語だった。彼女は眠りにつく前にいつもこうした者達に出会い、彼らと共に遙か彼方の砂漠、灼熱のジャングル、吹雪に覆われた山頂、そびえ立つ石造りの城塞、ピクシーが群れるアイムヘリンの林などを旅した。

カーリはいつか彼らに出会い、その場所に行こうと固く決心していた。しかし時と共に夢はいつしか色あせ、現実の重みがのしかかってくる。だが彼女の父が他界した時、彼女は覚えている物語のように行動しようと決意した。それ以来、彼女は旅をし続けている。

スダンニャは、彼女がまだ行ったことがない場所の一つだった。彼女の父親の話に、このクモがはびこる瓦礫だらけの王国と財宝が詰まった地下室の失われた都市は何回か登場した。ハドランホールドを去った後、彼女は今がその絶好の機会だと考えた。

ネビュランが彼女を必要としなかったのは残念だった。だが彼女の経験からすると、冒険者とはえてしてそんなものだった。どうして彼らに嫌われたのか、彼女には見当がつかなかった。たぶん気難しいエルフにとって彼女は陽気すぎたのかもしれない。いずれにしても、彼女は彼らと一緒にスダンニャまで旅をするだろう。彼らが知っていようといまいと。

彼らの大きい方の馬車の中に潜り込むのは簡単だった。ネビュランはランドンがまた樽を落とした後、彼と口論を始めた。カーリはその隙に、誰にも気づかれず馬車に乗り込んで、荷台の箱の後ろに隠れることができた。彼女はずっと冒険者のパーティに加わりたと思っていた。今日は彼女のラッキーデイのようだ。

「本当にここで停まるのかい？」周囲の森から目を離さずに、ランドンが神経質に尋ねた。

「もちろんだ。」ネビュランは短く答えた。「我々はスダンニャまであと半日の距離だ。そして暗くなってからそこに到着するのはよくない。今晚はここで休んで、明日進もう。」

ランドンはまだ何か文句を言ったが、ネビュランは無視した。その青年はモーウィンドを出てからというもの、めめそと不平を言ってばかりだった。ネビュランが彼をパーティに入れたのは、たんにフレネラが魔術師のメンバーが必要だと主張したからだったが、今ではグレイヘイブンの学生がほんの少しでも魔術を知っているのか疑うようになっていた。

ついでに、ネビュランは道に迷ったということ認めたくはなかった。どこで間違えたのか分からなかったが、彼が聞いたスダンニャの崩れる遺跡についての話からは、今いるような場所は思い当たらなかった。そこにはほこりまみれの財宝が散らばった太古の寺院や宮殿があると聞かされていた。だがその代わりに、彼らは骨のように折れやすい枯れ木が鬱蒼と立ち並ぶほこりまみれの林に迷い込んでいた。唯一の救いは、たどってきた道の轍は見失っていないことだった。

「火をおこしてくれ。」彼がコルレンに指示すると、オークはぼうぼう言った。フレネラは荷馬車の後部に行き、中の樽からリンゴをひとつかみと小麦の袋を引っ張り出した。ランドンは以前はパーティの食事準備係だったが、ネビュランは彼が食料を盗んでいることに気づき、代わりにフレネラを担当にしたのだった。

「今の聞こえた？」突然ランドンが言った。彼は前方の馬車のポニーにリンゴを食べさせていたが、小さく叫んで周囲の木々を目を見開いて凝視していた。ネビュランは大きなため息をついた。

「聞こえたって、何が？」

「わからない。」若者は哀れに答えた。「何かが動いているような音がしたんだ。あそこで。」

彼は近くの木々を指さした。木の枝はねじれ、ひびが入っている。ネビュランはまたため息をつき、短剣をかまえてそちらに歩いて行き、近くの枯れ枝をその刃でたたいた。

「なにもないぞ、ランドン。」仲間の方を振り返り、彼は言った。「この森は長いこと死んだままだ。コルレン、おまえは薪を集めに行くのか、行かないのか？」

オークはまたぶつくさ言って、ようやく道の反対側の枯れ木の中に歩いて行った。

だがすぐに叫び声が聞こえた。ネビュランは最初それが何かの小動物の怯える鳴き声だと思ったが、すぐに枯

れ枝を踏み割る音と防具がこすれる音がそれに続いた。コルレンが木の間から飛び出してきて、叫んだ。

「クモだ！」

ネビュランは思わず笑ってしまった。

「クモ？」彼は言い返した。「おまえ、まさか小さなクモが怖いなんて・・・」

彼は最後まで言うことができなかった。もろい木をバリバリとなぎ倒して、悪夢のような姿が道に飛び出してきた。それは巨大なクモだった。コルレンより大きく、太い足は剛毛で覆われ、二つの牙の間からよだれを垂らしている口の上にはたくさんの目が光っていた。

ネビュランも叫んで、後ろに下がって自分の弓を探った。コルレンはそのまま馬車の間を通り抜け走り去ってしまった。フレネラはただ悲鳴を上げ続けた。ランドンだけがなにもしなかった。彼は目を見開いたままその場で固まってしまい、怪物が突進してきても動かなかった。

それは彼を押し倒し、だぶだぶのローブの上から顎の牙でかみついた。ネビュランは震える指で弓の弦を張ろうとしていた。彼は怪物がランドンにしていることを見ていられなかった。

彼がそこから目を離す前に、何かは怪物に激突し、目のうちの一つに突き刺さった。クモは悲鳴をあげ、ランドンに乗ったまま身もだえした。ネビュランはそれがクロスボウの太矢だと気がついた。びっくりして振り向くと、彼がモーウィンドで不採用にしたドワーフのカーリがクロスボウを投げすてて、馬車の荷台から飛び降りようとするところだった。

「下がれ！」ドワーフは重そうな両頭のハンマーを構えながら怒鳴った。彼女はのたうち回る怪物に突進し、1発、2発、3発とその頭にハンマーを振り下ろした。とうとうクモはぐにやりとなったが、その手足は気味悪くまだびくついていた。

「皆さん、こんばんは。」カーリは硬直しているパーティの者達に朗らかに笑って、頬についたクモの体液を拭いた。

「あなたどこから来たの？」あつけにとられたフレネラは、呆然と尋ねた。

「ベイルハイム、あなた達と同じよ。」カーリはそう言って、馬車の中に2日も隠れて密航するのはしごく当たり前の事だとばかりに、肩をすくめた。

彼女は死んだクモに近寄り、膨らんだ脇腹にブーツを突き立ててひっくり返し、ランドンから引き剥がした。一瞬ためらった後、ネビュランは彼女に近寄り、倒れている学生を見下ろした。彼は真っ青で硬直しているように見えた。ネビュランは最初彼が死んでいるのではないかと思ったが、彼の目がちゃんと自分に焦点を当てていることに気がついた。

「ヤツは彼に何をしたんだ？」ネビュランはカーリに尋ねた。

「クモの呪いよ。」ドワーフはまるで喜んでるように答えた。「魔法的な性質の呪いだと言われているわ。前に見たことがある。それは意志力の弱い者に、物理的な力を使わずに麻痺させることができる。彼が自分の精神力で打ち勝たないかぎり、何時間かは動けないでしょうね。」

「なんで君はここにいるんだ？」カーリのことが気になり、ネビュランは聞いた。だした。「私は、あ〜、君がパーティに参加できないと言った筈だが。」

「私が来てよかったと思うでしょうよ。」彼女は静かにするよう、指を一本立てて答えた。ネビュランは顔をしかめたが、すぐに彼女が聞いた音に気がついた。

周囲の森がざわめき始めた。それとともに、小枝がパチンと割れる音、乾いた枝が折れる音、さらさらという音が聞こえてきた。彼らの周りで音はどんどん大きくなった。

「クモがたくさん。」カーリは呟いた。それを聞いて、エルフは恐怖にかられた。彼はこの奇妙な侵入者のことを信じたくはなかったが、彼女はとても真剣な様子だった。「クモの群れ全体ね。あなた達はヤツらの狩り場のちょうど端っこに停まったわけ。」

「ああ、神様・・・」フレネラはネビュランの腕を握りしめて口ごもった。「戻らなくちゃ、ネブ。じゃないとクモに皆食べられちゃうわ。」

「私ならやめとくね。」カーリは言った。「暗くなってきている時は特に。一番いいのは、火をたいて、かたまって動かないことさ。」

フレネラはネビュランを見上げた。彼はコルレンを探し、荷馬車の下で怯えた子どものようにうずくまっているのを見つけた。彼は唇をすぼめ、うなずいた。

「火だ。だが薪がたりない。」

彼らはできる限り急いで近くの木材を集めた。近づいてくるクモの群れの音はネビュランの皮膚をむずむずさせた。だがカーリの指示に従って馬車の周囲に同心円状に小枝や大枝の小さなかたまりを積み上げる間、そのことを考えないように頑張った。

彼女といえ、その奇妙なダンワーのドワーフは怯えているというよりは興奮しているようだった。ネビュランは彼女がなにを考えているのかまるでわからなかった。彼女はフレネラが火打ち石で枯れ木の枝に火を付けようと悪戦苦闘しているのを見て止めさせた。

「アタシはそれよりもっといい物を持っているよ。」そう言って、ポケットを探って透明な液体が入った小瓶1つと、小袋をいくつか取り出した。ネビュランとフレネラとうずくまるコルレンが見守る中、彼女は小袋から粉を少しずつ小瓶の中に入れて、瓶をよく振って混ぜ、注意深く薪の上に紫色の液体1滴を垂らした。

直ちに紫色の炎が燃え上がり、枝全体に広がった。

「これで一晩はもつ筈さ。」カーリは言い、次の薪に移った。「普通の炎よりも明るくてゆっくり燃えるんだ。」

「君はただの無法者の殺し屋ドワーフだと思ったよ。」ネビュランはカーリが馬車の周囲の薪の山に火を付けて回るのを見て言った。カーリは魔法の炎に顔を浮かび上がらせて彼に笑い返した。

「その通りさ。でも、アタシは錬金術師ギルドにも所属しているのよ。他にもいろいろね。幾つかの色合いの調合でどんなことができるか、あんたはきっと驚くだろうよ。」

彼らが作業をしているうちに影は長くなった。周囲の木々の間から聞こえてくるシューシュー、パチパチという音はどんどん大きくなってきた。ネビュランは炎の向こうで何か素早く動くのを見つけた。彼はフレネラを抱き寄せた。自分がここで死ぬとしたら、彼女の脇で死のう。その考えは、彼の怖じけた心にくらかの勇気を与えた。

「たき火の内側にいる限り、アタシ達は安全さ。」カーリはほとんど陽気に言った。「この学生を車輪にもたれさせて、みんなでかたまったらどうだい。夜が早く過ぎるように、アタシがお話を一つか二つ話してあげようか。」

夜明けはゆっくりと来た。灰色の光があたりの木々に差し込み、影を木立の奥深くに押し戻した。

たき火はちょうど長持ちした。カーリの紫色の炎は次第に小さくなったが、まだ燻っていて、疲れ切った面々にわずかな光を投げかけていた。

途中でカーリは、自分のお話がそれなりに効果あったことに気がついた。パーティを捕らえていた最悪の恐怖はいつの間にか和らいでいた。彼女が最後の話を語り終えるころには、フレネラはネビュランの肩にもたれかかって眠りに落ちていた。コルレンでさえも、馬車の下から這い出してきた。ランドンも、話すことはまだできなくとも、手足が少し動くようになっていた。

カーリは立ち上がって伸びをし、自分のクロスボウを背負った。一晩中彼らを悩ませた不吉な雑音はいつの間にか途絶え、周囲の枯れた木々は静寂に包まれていた。

彼女は疲れ切った面々をちらっと見た。彼らは結局のところ、まったく実力不足だった。彼らが出発する前に、そうと気づくべきだった。それでも、昨日は興味深い夜だったし、彼女のレポトリに新たな話を加えてくれた。彼女はたき火を通り越して、昨日来た道に戻る方向に歩き出した。左右の木々の間に動くものは何もなかった。

「どこに行くんだ？」ドワーフが行く方向に驚いた様子で、ネビュランは尋ねた。彼女は振り返り、ニヤリと笑った。

「ベイルハイムに戻るのさ。」メンナラじゅうで最も明白なことでもあるかのように、彼女は答えた。

「でもスタンニャはもうすぐそこだぞ。たぶん。」ネビュランは言った。「俺たちと一緒に来ないか？」カーリは軽く肩をすくめた。

「そうさね。たしかに、アタシは一緒に行ける冒険者のパーティを探しているわ。」彼女は認めた。「でも、悪く思わないでほしいけど、あんた達4人は、お話に出てくるヒーローのようにはぜんぜん見えなくて。たぶん、また今度ね。」